



『陰陽雑書抜書』永禄6年(1563)
「厠造吉日事」と「鬼ノ目打ツ時ノ作法」

町史

とっておきの話

184

東洋大学講師

久野俊彦

楮戸龍藏院の『陰陽雑書抜書』 戦国時代の節分豆まき

先づ、節分ノ夜、歳徳ノ方向ニ、心経三巻ヲ読ミ、次ニ歌詠ミヲ云フ。「打ツゾ鬼ハ外ヘハラハラト出ケリ福ノ三ツ内入り豆ノヲト」

其ノ後、大豆ヲ一ツカミ、ツカミテ、一角ヘ三度ツ、打ツベキナリ。先ツ「富内ヘ入レ」ト打チ、「鬼ハ外ヘ出ヨ」ト打チ、「福ハ内ニ入レ」ト打チ留ムベシ。此クノ如ク、四角ヲ打ツハ、三十四二度ナリ。十二月ノ不祥ヲ払ヒテ、福寿召ス表示ナリ。

又云フ、一角四度ト打ツ。其ノ時ハ斯ク前ノ如ク、心経、詠ミ歌ノ後、大豆ヲツカミ、先ツ十二打チト打ツテ、次ニ「鬼ノ目ヲ打ツ」ト打チ、次ニ「鬼外ヘ出ヨ」ト打チ、次ニ「福内ニ入レ」ト打チ留ムナリ。加様ニ四角ヲ打ツハ、四々十六度ナリ。一年中、春夏秋冬、四季四方ノ不祥ヲ払ヒ、福徳ヲ召ス相ナリ。

これによれば、節分の夜は、まづ歳徳神がいる明きの方に向かつて『般若心経』を読み、「打つぞ鬼は外へはらはらと出けり福の三つ内入り豆の音」という呪い歌を詠みあげて、大豆をつかんで、部屋の四隅に3度ずつ豆を打ち、「富は内に入れ。鬼は外へ出よ。福は内に入れ。」と言いま

す。一部屋の四隅で3回ずつ12回豆を打つのは、一年12カ月の災いを払って福徳を招くためです。また、「鬼の目打つ。鬼外へ出よ。福内に入れ。」と言つて四隅で4回ずつ豆を打ち、合計16回打つのは、春夏秋冬の東西南北にわたつて災いを払って福徳を招くためだといえます。

戦国時代から江戸時代初期の様子を伝える狂言「節分」では、「福は内へ。鬼は外へ。」と言つて鬼を払います。これは『陰陽雑書抜書』の掛け声に似ています。南会津町(旧田島町)金井沢では、豆を炒る時に、「はらはらと鬼の目玉を炒りつづせ福徳内の豆炒りの音」という呪い歌を唱えま

す(『田島町史 民俗編』)。また、山梨県富士吉田市では、「福は内、鬼は外、鬼の目ぶつつかれ(ぶつつぶせ)」と3回唱えて、部屋の四隅に豆をまきます(『富士吉田市史 民俗編II』)。これらは、『陰陽雑書抜書』の呪い歌や豆打ちの記述とよく似ています。節分行事の作法が陰陽道の書物に記され、陰陽師や修験者(法印)が村々に節分の作法を説いたために伝わったのでしょうか。

陰陽道とは、中国で成立した道教のうちの暦や占いや呪いの

技術が伝わって日本で成立した呪術的な宗教です。陰陽道の暦の占いや呪いは、鎌倉時代に成立した『篋笈伝』に記されています。ほかにも、『陰陽雑書』『日法雑書』『吉日考秘伝』などの陰陽道書が作成されました。これらは、占いや呪いのこまごました知識を寄せ集めた書物であり、「雑書」と呼ばれます。雑とは多種類の集まりという意味です。龍藏院の『陰陽雑書抜書』は、これらの陰陽道の「雑書」からの抜き書きした便利帳です。そこには、田水始めの日、種まく日、山入りの日など、生活に密着した日取りの良し悪し(吉凶)が記されています。現在でも吉日を意識して「暦本」を見るように、「日を見る」ための書物です。この書物にはかなりの手垢がついており、つねに参照されたことがわかります。戦国時代の陰陽道書はあまり残っておらず極めて貴重な書物です。戦国時代の陰陽道書が奥会津に現存しているとともに、その知識が修験道の法印によって村人に伝えられ、民間伝承としても現に存在していることに意義があります。

節分には「福は内、鬼は外、エベス・大黒・宇賀の神」と大きな声で唱えながら豆をまきます(『只見町史 民俗編』)。旧暦では節分は歳末にあたることが多いので、年取りの行事でした。節分の豆まきは室町時代から行われるようになりまし。京都の記録では、『花宮三代記』応永32年(1425)や『臥雲日件録』文安4年(1447)12月22日には、節分に「鬼は外、福は内」と言つて、歳徳神がいる明きの方(恵方)から豆をまき始めたと記されています。節分の豆まきが、日本中いどのように広まったのかは明らかではありませんが、只見町楮戸の修験・龍藏院には、室町時代末期の節分の豆まきの作法を記した『陰陽雑書抜書』が伝えられています。この書物は、暦の占いや呪いを記した書物で、永禄6年(1563)の奥書があります。次に節分の一節を訓読して示します。

鬼目打ツ時ノ作法